論壇時評-「ジャパネスク」戦略の意味　欧米模倣への批判も

『信濃毎日新聞』1981年12月23日

# 論壇時評

# 「ジャパネスク」戦略の意味

# 欧米模倣への批判も

松本健一

## 自己肯定の動き表面化

欧米をモデルとする近代を追い求めた結果、わが国はいわゆる「経済大国」となった。これは、ジャパン・アズ・ナンバーワンというべき言葉が象徴するように、日本にとって欧米がすでに見ならうべき理念型でなくなった、ということでもある。

そこに、日本それ自身の肯定という動きが表面化してくる必然性があるようにおもわれる。CMに「日本」や「日本語」を強調したものが多くなってきたのも、このためである。「ジャパネスク」（日本ふう）というイメージ戦略も、こういった思潮と無関係ではない。

この「ジャパネスク」というイメージ戦略の意味するものについては「広告批評」の十一月号の長時間討論「ジャパネスクって、なんだ」（筑紫哲也、谷川俊太郎、松本健一、磯崎新、五木寛之）が、委曲をつくしている。また「朝日ジャーナル」新年合併特大号の特集「「日本回帰」の超克をめざす」も、多くこのテーマを扱うはずである。（十二月二十日現在、未見）。

ちなみに、前者の「広告批評」の長時間討論については、わたしは八一年の〈雑誌論文ベスト3〉にとりあげておいた。弁解めくが、そんなに重要なものを、なぜ十一月号の論壇時評で扱わなかったか、というと、その討論のメンバーのひとりがわたしだからである。自己宣伝のようになるのが、イヤだったのだ。

しかし、二カ月遅れでもいいから、わたしはこの長時間討論「ジャパネスクって、なんだ」についてふれておかなければならないとおもうようになった。それは「読売新聞」の先日の文化欄「論点この一年」で、各新聞の論壇時評の担当者がとりあげている〈雑誌論文ベスト3〉が、わたしを除いてだれもこの「ジャパネスク」というイメージ戦略の重要性を認識していなかったからである。

## 自分が何人だかわからない

わたしが「ベスト3」にあげたのは、この「ジャパネスクって、なんだ」のほかに、松本圭一「都市型社会と防衛論争」（「中央公論」九月号）と、「新沖縄文学」四十八号（六月発行）の総特集「琉球共和国へのかけ橋」である。（この「新沖縄文学」も、わたしが小さいながらもエッセーを書いているため、論壇時評で扱わなかった）。ところが、わたしが「広告批評」と「新沖縄文学」という重要な問題提起をした雑誌をとりあげたのに対して、他の五人の論壇時評の担当者、木戸翥（神戸大学教授、東欧現代史）、高畠通敏（立教大学教授、政治学）、中嶋嶺雄（東京外語大学教授、国際関係論）、正村公宏（専修大学教授、経済学）、樺山紘一（東京大学助教授、西洋史）がとりあげたのは、文芸春秋系の「諸君！」の一誌を除けば、あとは全部「世界」「中央公論」「文芸春秋」のオンパレードだった。それだけで日本の言論界が成り立っているかのようだ。こんなばかなことがあるだろうか。

これ以上の批判は、論壇時評の範囲を超えるのでやめるが、読者にもし機会があれば、ぜひとも「広告批評」十一月号と「新沖縄文学」四十八号に目をとおしていただきたい。そうすれば「ジャパネスク」というイメージ戦略のもつ意味の重要性について看過できないものがあることだけは、了解してもらえるだろう。

ところで、この「ジャパネスク」の一環に主体的にかかわっている歌手の谷村新司は「北京の日の丸」（「文芸春秋」）に、日本それ自身の肯定につながるアモルフ（否定形）な感情を、こう表明している。「俺は、中国で、バンコックでもそうだったけれど、歌いながら、日の丸がみえた。日本がみえた。日本人だと思えた。日本にいると、自分が何人だかわからない。自分がアメリカ人かも知れないと思うそんな瞬間がある」と。

## コンプレックスの裏返し

こういった谷村新司の、日本の自己肯定とでもいった衝動は、これまで百数十年、日本人がいちずに欧米を理念型として模倣してきたことへの批判でもあり、またコンプレックスの裏返しでもある。たとえば、この論壇時評の十一月号で「産業知識人」の典型としてとりあげた長谷川慶太郎と竹内宏が、「現場派エコノミストの手の内公開」（「東洋経済」新年特大号）と題した対談で、次のようなことをいっている。

竹内　…終戦直後の少年時代に進駐軍からもらったチョコレートを少しずつちぎってペロペロなめていた時代の印象がいまだに強烈でしてね。しかも、その目の前を、進駐軍の兵士と日本のコールガールが、だらしない格好をして手を組んで歩いている。

日本はこんな連中に負けたのか！　という怨念（おんねん）が、日本経済の前途を強気にみようとする僕の価値観と結びついているような気がするんですよ。

長谷川　同感。われわれ昭和一ケタ生まれは、皆同じような感情を持っていますな。敗戦を体験した日本人の心に、いつか見ておれ、というコンプレックスに根ざした衝動があることは、そのとおりであろう。そしてそれは、日本近代の欧米に追いつこうというエネルギーにも共通する心理であった。それゆえに、こんにちジャパン・アズ・ナンバーワンという標語が受けるのである。

## 兄弟の言語という実感

なお谷村は、さきのエッセーで日本と中国が「文字が同じ」であるため「民族的な近さと親近感を感じる」とも書いている。これは、かつての同文同種、という言葉を連想させずにはおかないはずである。長谷川慶太郎や竹内宏の次の世代、つまり谷村新司やさだまさしら、わたしと同じ敗戦直後に生まれた三十代前半の世代は、いま微妙なところに来ているといってよいだろう。

このことは、やはり同世代の中上健次や立松和平や宮内勝典といった作家たちにも共通することである。「すばる」一月号で、立松和平と対談している中上健次は、次のようにいう。（「われら二人、この生ぬるい時代に屹立（きつりつ）する」）。

「面白いのは、韓国人と話す英語というのは、アメリカ人なんかとよりも、はるかによく通じるよ。なぜかというと、つまり文法構造が韓国語と日本語ではほとんど同じなわけだ。…（それらは）本当に兄弟の言語だなということが、英語―というより、もはや別の言語だけれど―を媒介にして実感できてくる」と。

中上の発言は、韓国人とは「一応日本語では絶対話すまい」という歯止めがきいているぶんだけ、谷村新司のそれとはちがう。しかし、欧米のかなたに「アジア」を浮かび上がらせてくる心理は、微妙に似ている。こういう心理にまで踏み込んでいかないと、思想とはいえない。神井林二郎、永井陽之助らの「レーガン体制の再検討」（「世界」）は、なかなか面白いシンポジウムだが、問題をパワー・ポリティクスの局面に限りすぎていて、思想に踏み込んでいないきらいがあるのだ。

（評論家）